

シンポジウム「東京南部の青春」出席報告 —「ならべ読み」の可能性について

西川 祐子

I はじめに—京都文教大学図書館所蔵「鶴見和子文庫」を拠点として

京都文教大学図書館には、社会学者、故鶴見和子の蔵書と研究資料から成る「鶴見和子文庫」がある。鶴見和子さんが病に倒れ1995年に京都の宇治市にある介護つきホームであるゆうゆうの里に入居された際になされた東京のご自宅の書庫の本他の寄贈と、2006年8月に亡くなった直後にご遺族からなされた寄贈を併せたものである。蔵書の大部分は散逸させず開架の一箇所に集めて設置し一般読者の利用に供してほしい、という故人の意志にもとづき、京都文教大学図書館の「鶴見和子文庫」として公開されている。フィールドノート他の研究資料は、「鶴見和子文庫未公開部分」として現在データ化の作業がすすめられている。第二次世界大戦の戦後、20世紀後半の思想界において活躍し、さまざまな運動と運動、人と人を繋ぐ結節点としての役割を果たした鶴見和子の蔵書と研究資料は戦後研究の宝庫であると言えよう。

京都文教大学はすでに「鶴見和子文庫」を対象として共同研究を発足させている。京都文教大学人間学研究所の共同研究「個人の思想形成と蔵書の研究—京都文教大学図書館所蔵の鶴見和子文庫を手がかりとして—」（2007～2009年度、代表：鶴飼正樹・高石浩一）と科研共同研究「『普通の人の哲学』と『知識人の思想』の葛藤をめぐる戦後思想史—鶴見和子文庫を開く」（基盤研究（B）、課題番号20320019、2008～2010年度、研究代表者：鶴飼正樹、研究機関京都文教大学）である。

また、京都文教大学人間学研究所は2006年度には「鶴見和子の仕事と鶴見和子文庫から思想と方法論の水脈をさぐる」と題した全4回の連続シンポジウムを行った。つづいて2007年6月にはシンポジウム「生活綴方から『戦後』を考える—鶴見和子文庫をひらいて」を開催した。このシンポジウムには、戦後の生活綴方運動の代表的作品である『やまびこ学校』（無着成恭編、初版は青銅社、1951年、岩波文庫、1995年）に参加し、その後も山形県の農業地帯からの発信をつづける佐藤藤三郎さんと、三重県四日市市の石油コンビナート地帯で、公害裁判の記録とかつての紡織工場においてはじめて生活記録を今もつづけている澤井余志郎さんのお二人に講演をしていただいた。2年後には同シンポジウムの記録を中心に、西川祐子・杉本星子編『共同研究 戦後の生活記録にまなぶ—鶴見和子文庫との対話・未来への通信』（日本図書センター、2009年）をまとめ、刊行した。

シンポジウム「生活綴方から『戦後』を考える」の会場配布資料として作成した佐藤藤三郎関連年表、澤井余志郎関連年表、社会変動年表の「つづけ読み、ならべ読み年表」は『共同研究 戦後の生活記録にまなぶ』にも収めた。同年表を作成してはじめて、佐藤、澤井両氏がそれぞれに記録してきた農業地帯と工業地帯の変遷が表裏一体となって1950年代の日本社会全体の産業構造を変化させ、農村地帯から都市への大量の人口移動が生じるという大きな社会変動がうかがいあがった。同時に資料を部分的ではなく、全体を1つの資料体としてとらえたうえで「つづけ読みとならべ読み」をするという資料分析手法を強く意識する機会となった。

シンポジウムを用意していた時期に復刻版・生活を記録する会（代表 澤井余志郎）編『紡績女子工具生活記録集』Ⅰ全7巻（1952年～1961年）、Ⅱ全5巻（同上、1964年～2008年）が日本図書センターから出版（2002年、2008年）された。同じく澤井余志郎が代表する公害を記録する会編『四日市公害市民運動記録集』（1971年～1982年）全4巻も出版された（日本図書センター、2007年）。「鶴見和子文庫」に拠って共同研究をつづけてきたわたしたちは、これらの復刻版を参照することによって鶴見和子が社会学者として研究対象とし、また運動にも深くかかわった生活記録運動の全貌を見渡し、鶴見和子文庫に所蔵されている書籍、原資料を歴史的文脈のなかに位置づけて考察することができた。わたしたちは京都文教大学図書館の鶴見和子文庫において原資料にふれることができるのであるが、同時に個人の蔵書にはたとえば雑誌の欠号があり得るし、小冊子の出版時期などを確定させることにも苦勞することが多い。個人文庫にくわえて復刻版を参照することによって、原資料をよりよく理解することができ、逆に個人文庫に収納されている原資料のおかげで、とうぜん編集の手が加えられている復刻版を、より多方面から深く読むことができる。

その後、さらに複数の出版社が1950年代に日本全国のさまざまな地域で展開されたサークル運動の記録であるサークル雑誌の復刻をはじめた。2009年には、ひきつづくサークル雑誌復刻版の刊行のなかでも、『東京南部サークル雑誌集成』（不二出版）全3巻と付録が出版された。¹

筆者わたしは、出版案内のパンフレットに推薦文を依頼され、次のような文章をしたためた。むろん『東京南部サークル雑誌集成』と鶴見和子文庫資料や生活記録運動資料とを比較研究することを念頭において書いた文章である。

「言葉をリレーする

西川祐子

復刻版によって60年後の21世紀に、1950年代のサークル雑誌を読むことができる。ガリ版と呼ばれていた謄写版印刷の几帳面な手書きの字は、鉄筆で一字一字、刻まれたままで

ある。詩文が多く、ページ構成とレイアウトに工夫がこらされている。頁に挿入されている小さなカットも手描きの写しであって、まだ焼け跡の残る風景、特殊管理地帯であった朝鮮戦争の軍需産業の工場、大型トラックと戦車、ショールを真知子巻きにした女性像、故郷の山河など、さまざまなテーマが時代を語ろうとする。後世の読者である私たちの想像力はどこまでこれらの労働詩の現場に近づくことができるか。読む力が問われるであろう。

まずこの復刻版で東京南部サークル雑誌を「つづけ読み」して、1945年がけっして世界の終戦ではなく、占領期のあいだ日本列島もまた戦時体制の下にあったと知る。戦争特需とその後の不景気を経て高度経済成長へ向かう社会変動の大きな波、その波をかぶりながらそれぞれが一本の考える葦としてもらす言葉をうけとる。それから現在、刻々と復刻されつつある1950年代の各地のサークル誌や、生活綴り方、生活記録の膨大なテキストを「ならべ読み」できるのではないか。その上で、いわゆる55年体制のなかで過ごした生活以外の選択肢を想像してみることが、今とても大切に思われる」

その後、この『東京南部サークル雑誌集成』の出版を記念してシンポジウム『東京南部の青春』が2009年11月23日午後1時半から東京都大田区嶺町特別出張所・3F集会室で開催された。わたしは同シンポジウムに出席し、その報告を2010年1月30日に前述の科研共同研究「『普通の人の哲学』と『知識人の思想』の葛藤をめぐる戦後思想史－鶴見和子文庫を開く」が主催し、同大学においてひらいた定例研究会において報告した。

本研究ノートは、口頭でおこなった同報告原稿に加筆訂正したものである。1950年代の諸地域におけるサークル活動の軌跡が復刻版によって読めるようになったという新しい研究環境をふまえて、あらためて鶴見和子文庫を拠点にして主体的、積極的に他の諸研究機関、他の共同研究グループと研究交流を行い、より広い視野

を獲得する可能性がうまれたことを指摘し、また各資料体の「つづき読み」だけでなく、同時代の他の地域の資料と「ならべ読み」を行うことによって、同時代全体を覆った大きな社会変動をとらえる必要性を強調しておきたい。

II シンポジウム「東京南部の青春」に出席して

ここでいう東京南部とは、東京都大田区、目黒区、品川区、港区に広がっていた工業地帯を指す。1950年当時にはこの地域一帯に200を超える労働者サークルが結成され、それぞれがサークル誌の発行を行っていたのであった。シンポジウム会場はとうぜんのことながら、現地のひとつ、大田区に設定されていた。東京についての土地勘が不足するわたしは、この機会に地図を見て工場地帯と田園調布にある郊外田園都市地域とがかくも近接していることを知って驚いた。工業地帯は東京港の臨海地帯であり、一方に羽田空港がある。占領期の羽田空港はむろん米軍が警備にあたる軍事基地であった。とくに朝鮮戦争（1950年6月25日－1953年7月27日停戦）のあいだ、この工場地帯は軍需産業の工場が林立していた。戦後研究をするためにも、シンポジウムの機会に現場近くに行くことができたのは貴重な経験であった。

京都文教大学の鶴見和子文庫に依拠したわたしたちの共同研究が最初に注目した生活記録運動は、四日市市で展開されたのであったが、澤井余志郎とその仲間たちが働いた工場は輸入品である羊毛を陸揚げする港町である現四日市市にあったのであり、その後の日本社会全体の産業構造の変化にともなって、臨海地帯に巨大な石油コンビナートが建設され公害問題を引き起こしたのであった。東京湾と京浜工業地帯は四日市港とその周辺にひろがる工業地帯と共通する立地条件を有する。工業地帯の拡大が漁業を圧迫するなど、同様の問題が生じている。

シンポジウム「東京南部の青春」当日には、復刻版出版に先立ち2007年12月に臨時増刊号をだして「戦後民衆精神史」と題する特集を組み、東京南部サークル運動の研究を紹介した『現代思想』誌編集部の池上善彦氏、このたびの復刻版を出版した不二出版の大野康彦氏などのあい

さつの後、「東京南部サークル研究会」の池上氏と道場親信氏の司会によって進行した。

最初に詩の同人誌が多かった東京南部サークルの同人誌から抜き出した詩が森美音子氏によって朗読された。東京南部でくりひろげられた文化活動サークルの詩人たちは大多数が男性であったのだが、男性詩人たちによって執筆された詩を女性の声で朗読することには、演出側のなんらかの意図があったかどうか、とくに説明はなかった。この日のシンポジウムの登壇者は、朗読者をのぞくとパネルディスカッションに登場した浜賀知彦、白石嘉治、丸山照雄、浅田石二、望月新三郎、山室達夫諸氏をふくめ全員が男性であったので、あえて女性の朗読者が選ばれたのかもしれない。いずれにしろ後に述べるようにジェンダーの偏りは、「ならべ読み」をする際の注目点の一つとなるであろう。

つづいて日本近代史を専攻する歴史家、成田龍一氏が、同人雑誌収集と研究、そして復刻版出版の歴史的な位置づけをし、その意義を説明する基調講演を行った。1950年代の東京南部には職住接近のある、濃い人間関係が存在し、表現者と読者が互いに顔が見える関係にあつて同人誌特有の手渡しネットワークが緊密にはりめぐらされていたことが指摘された。基調報告はこの地で創作、編集、出版された膨大な同人誌資料がまちの歴史家によって長年ていねいに収集保存され、この資料体に注目した共同研究が組まれた結果、いま復刻版として陽の目を見たことの意味は限りなく大きいと評価した。1950年代は、文化運動と歴史学に共通する青春期であつて、運動は自らを、歴史を動かす主体と自覚し、歴史学がそれを認めるという関係があつたが、1980年代以降の歴史学はむしろ1950年代を無視して戦後を語る傾向があつた、それは労働と階級闘争とがテーマとしての重要性を失ってゆくことでもあつた、とも述べた。成田報告は、資料の発見がもういちど歴史学に衝撃をあたえ反省をうながすであろうという予想をもってむすばれた。²

休憩をはさんでシンポジウム後半には、東京南部で展開された運動の当事者たちが生き証人として壇上に並ぶところが壮観であつた。『詩

集下丸子』の表紙となった自ら彫った版画の版木をもって参加した桂川寛氏の発言もあった。かつてあった濃密な人間関係を伝えようとする証言がつづいた。労働者たちがそれぞれ田舎に故郷をもつ人々であって都会の孤独のなかで響きあう「共鳴板」をもっていったという指摘があった。シンポジウムのタイトルに「青春」とあるが、それが太平洋戦争の焼け跡と現に朝鮮半島でくりひろげられていた朝鮮戦争の「闇の中の青春」であったことを伝えようとする発言もあった。朝鮮戦争においては東西の冷戦構造がにらみ合い立ちすくむ以前の、なまなましい破壊と殺戮がくりひろげられた時期であった。東京南部地帯は羽田空港を中心とするアメリカ軍基地であり、軍需産業地帯として存在し、労働者の労働は多かれ少なかれ基地と兵器の生産と修理のための工場に依存するものであった。そこで繰り上げられた労働運動の工作者、文化運動に参加する前衛たちと運動の当事者である労働者との関係についての証言がつづいた。

討論の時間に会場からの発言をもとめられて、わたしは首都圏だけでなく、各地方でくりひろげられた労働運動、文化運動、そして生活の軌跡を各地サークル雑誌復刻版で「ならべ読み」する際に、基幹産業の違い、労働者のジェンダーの差などが注目点になること、「ならべ読み」をいくつかくりかえすことによって、全体を覆う大きな社会変動の姿を浮かび上がらせる共同研究が可能なのではないか、京都文教大学図書館所蔵の鶴見和子文庫を拠点とする共同研究はすでにその最初の試みをはじめている、と述べた。

Ⅲ 復刻版『東京南部サークル雑誌集成』と復刻版『紡績女子工員生活記録集』（および復刻版『サークル村』）との「ならべ読み」

復刻版『東京南部サークル雑誌集成』は京都文教大学にも早速に科学研究費により購入されている。先に京都文教大学図書館が購入した、生活を記録する会編『紡績女子工員生活記録集』ⅠⅡ合計12巻、公害を記録する会編『四日市公害市民運動記録集』全4巻と「ならべ読み」が可能となった。その後、九州の筑豊炭鉱

地帯を中心としてくりひろげられた労働運動から生まれた『サークル村』の復刻版（不二出版、2006年）も備えられた。

なお、シンポジウム「東京南部の青春」に出席する前のわずかな時間に、会場にほど近い目黒区美術館で開催されていた「文化資産としての〈炭鉱〉展」に行くことができた。森崎和江『まっくら』の挿絵に用いられたことのある山本作兵衛が炭鉱生活を描いた作品の数々、土門拳「筑豊のこどもたち」他の作品のほかに、同人雑誌『サークル村』が展示されていた。この展覧会とシンポジウム「東京南部の青春」が同じ時期に開催された偶然是、1950年代のサークル運動の再評価という大きな流れのなかには一種の必然であると思われる。労働運動、自前の表現など、1960年代以降の高度経済成長期に記憶の底にすずめられていたものの復活、再評価の動きの背後にはもちろん混迷する現代の社会問題にたいする共通する疑問、苛立ちが存在すると思われる。わたしたちの共同研究が早くにもった問題意識が普遍的なものであることの証しを見るおもしろいであった。

四日市を中心とした生活記録運動と東京南部サークル雑誌と九州の『サークル村』他という、1950年代の工場労働者サークル活動の同人雑誌という性格を共有する資料体を「ならべ読み」することによって、わたしたちが研究をはじめた澤井余志郎とその仲間たちの生活記録運動の特色がより鮮明になるように思われる。

わたしは現在、四日市の生活記録と東京南部のサークル雑誌復刻版の「つづき読み」を試みている段階にあって本格的な「ならべ読み」ができたわけではないが、それでも浮き上がってきた共通点／相違点を今後のために整理し、今後の「ならべ読み」のために、5つのポイントにまとめてみた。1) 基幹産業の種別 2) ジェンダー 3) 農村地帯との関連性 4) 表現のジャンルと文体の違い 5) キーパーソンあるいは工作者の役割

1) 基幹産業の種別

工業地帯は時代と共に、それぞれの性格をあげしく変えてゆく。1950年代の東京南部は東日

本重工業のような朝鮮戦争のいわゆる特需を直接に請け負う企業、工場が集まり、さらに無数の下請け会社、町工場が林立する地域であった。東京南部の文化サークルの代表的存在である下丸子文化集団はこの東日本重工業の工場で首切りにあった労働者たちが中心となって形成された。他にも戦車のような兵器の部品の製造、兵器の修理などが細分化されて中小企業へとおろされてゆく複雑な仕組みが地域にひろがっていた。じっさいには無数の女性労働者が働いていたが、基幹労働者は未婚、既婚の男性であった。文化運動の担い手は主に若い男性労働者であって、一日の激しい労働の後で狭い下宿部屋である「解放区」に集まり、深夜まで議論を交わし、ガリ版を切り、冊子の編集と製作を行った。

彼らの労働が朝鮮戦争特需に直接に依拠していたため、彼らは日本だけでなく世界の政治経済動向に敏感であるという特徴をもつ。羽田空港に離着陸する軍用機は生きた兵士、そして兵士の遺体を運送し、朝鮮戦争の情報をなまなましく運んできていた。労働者たちはその他に朝鮮半島、中国、ソ連の短波放送からも積極的に情報を得ていた。労働運動、文化運動に朝鮮人労働者あるいは在日韓国人の参加が見られる。松川事件にたいする言及、さらには抗議運動もはげしく行われている。

四日市市の工場群の場合も軍需産業と無関係ではなく、毛織物の工場は、戦争中は軍用毛布と軍服の生地を生産していたのであった。澤井余志郎氏の証言によれば、東亜紡織泊工場も戦争中の軍需工場が敷地、工場さらには人員までまとめて戦後、民間に払い下げされたものである。しかし、戦後の四日市は東京南部とくらべれば、朝鮮半島で展開されていた戦争からは距離があったようにみえる。

2) ジェンダー

男性労働者中心の東京南部に比べると、四日市の繊維工場においては、戦後はとくに新制中学卒業直後に集団就職列車に乗って工業地帯に集まった若い独身女性が基幹労働者として生産ラインに就いていた。この違いは大きい。女性労働者たちはまた、工場の寮という独特の空

間で共同生活を送っていた。下宿やアパートでそれぞれが部屋をもって生活する東京南部の労働者の青春よりもさらに濃い人間関係を生きていたというべきであろう。

東京南部の青年、男性労働者たちと四日市の娘、女性労働者たちの違いを浮き上がらせる一つの例として、両方の同人雑誌に共通して登場する「母親」像の、大きな違いをあげておこう。息子にとっての母親像と娘にとっての母親像のちがいをということもできよう。

東京南部の文化運動は詩人を輩出するのであるが、そのなかでも高島青鐘と名乗る詩人が『詩集下丸子』に詩を寄せている。世帯をもちある年齢になると次第にサークル活動から遠ざかる傾向がある労働者たちのなかであって、青鐘は自伝的詩からうかがえるように兵隊経験のある中年の労働者であり、離婚した妻とのあいだに生まれた女の子を自分の母親の手をかりて育てている。自伝的長詩のなかには病気をかかえた詩人が入退院をくりかえす様が描かれ、雑誌には同志たちが病床の彼と老母と娘のために献金をつのる文章も載っている。二段組の『詩集 下丸子』第2号全68頁のうちの38頁を占める「母をみつめて」は自伝というよりは、母と自分と幼い娘の三代の伝記である。

長詩は「いろはもしらされない／九つのおふくろは／人さまの飯たきをし子守をし／くる年くる年／お正月も お盆もお祭りもなく／きれいなきもの 花かんざしもなく／ただおふくろはすすけた顔を泪でうめて／親を呪ったそうだ」で始まる。18歳で妾イロハニ4人とその子どもたちがすでにいる男と結婚した詩人の母親は29歳まで、そのような生活に耐えた。「だが或日かんにんぶくろの緒がきれて／妾いとおやじのさかもりに灰かぐらをくらわせて／おれと兄貴もおきざりに／夢中で東京へ出ていったおふくろ」とうたわれている。再婚した夫と死別の後、彼女は2人の息子をひきとり、自分の働きで母子家庭を維持する生活をはじめが、上の息子に背かれる。下の息子「おれ」は戦争中、三度の召集のあいだに結婚、病を得るが戦争を生き延びて帰還し、労働の日々をおくり、組合運動に従事する。

しかし家族同居が実現すると、妻と姑の争いが深刻な状態になってゆく。「妻は妻らしい考えの自由を求めて／おれの寝床から はばたいていった 一人の女の子を残して 涙もみせず／妻らしい自由を求めて 羽ばたいていった／女はいいな／結婚を就職だと思っている／おれの家族会社は破産しているんだ／おふくろは三つの孫を抱いた しっかりと／おれは三つの時 おふくろの抱擁からつきはなされた／おふくろはあの時のおれを抱いている気持ちだといった」という節がある。

無理をかさねた「おれ」が病に倒れて入院すると「おふくろ」は63歳で孫の面倒をみながら掃除婦をはじめ。詩は病床から主人公が「ああおふくろ／おふくろの黒い目のあるうちに／きっと／おれ達のつくる新しい世界を／みせてあげるよ／ありがとう／おれもがんばるぞ／ありがとう おふくろ」と結ばれている。家族のために生きる他には選択肢のなかった貧しく、懸命な、いわば日本の母の原像のような女の姿である。

他方、生活を記録する会の最初の文集は「私の家」（1952年）であり、つづいて文集「私のおかあさん」（1953年）、文集「母の歴史」（1953年）を発行、そこからの抜粋、編集された単行本である木下順二・鶴見和子編『母の歴史』（河出新書、1954年）が生まれた。また「生活を記録する会」との集団製作による広渡常敏作『明日を紡ぐ娘たち』はこれらの文集を集大成した戯曲となっており、1957年に上演され、2007年には東京演劇アンサンブルが広渡常敏追悼公演と銘うって再演している。開幕前、スクリーンには「この芝居をわたしたちの母ちゃんに贈ります」という字幕が出るのだが、そこには「わたしたちはみんなで母ちゃんのことを書いたんだけど、母ちゃんのようにはなりたくないと思います」という言葉もまた映し出されていた。

「生活を記録する会」の文集と本、そして戯曲には、『詩集 下丸子』の青鐘の詩におとらず貧しく不幸な母の生涯の数々が、これも青鐘の詩におとらず赤裸々に描かれている。しかし、同様の母たちを観察の対象としても、息子の視

線と「母の歴史はもうくりかえしたくないんです」と言う娘の視線とは違う。息子である青鐘の詩「母をみつめて」は、「ありがとう」の感謝のことばで終わる。長野県伊那谷から集団就職して工場へやってきた娘たちは村に生きる母親を思いながらも「母の歴史を繰り返さない」と決心するにいたる。その上で彼女たちの半数は工場生活をおくった「進歩的百姓娘」として村へ帰って農家に嫁ぐ。

そしてかつての娘たちが自分自身、妻となり母となった後の記録が、生活を記録する会編『四日市女子工員の生活記録』パートⅡ全2巻となったのであった。彼女たちの夫たちはやがて高度経済成長期には妻たちと入れ替わるようにして首都圏や地方都市に職をもとめ、出稼ぎ労働者となる。彼女たちはいわゆる「かあちゃん農業」の担い手として、また農業のほかの現金収入をも求めて、自分たちの母親にもまさる重労働の日々をおくり、その一方で自分たちの母親とはちがう経済力と発言権をもつ存在となった。

「ならべ読み」をすることによって、四日市の女子工員たちが到達した「母の歴史を繰り返さない」という決意が、複雑にかさなるさまざまな抑圧をかいくぐって生まれたことがよりよく理解できる。母の歴史に着目する、という発想は戦後の民衆史研究のなかには早くからあった。新書版『母の歴史』の最後に澤井余志郎が書いた「ノロノロと歩んできたなかまたち―『母の歴史』を書くまでのこと」のなかには次のような文章がある。

「文集『私のおかあさん』は、全組合員にクバられるほどつくらなかったことから、組合大会で、みんなにクバるようつくってほしいといった意見や、もっと母の問題をつきすすんで考えあおうとしていたときに、雑誌『歴史評論』（28年5月号）に、ふるかわさんの「母の歴史を書こう」という呼びかけがあった。ふるかわさんは、『歴史と民族の発見』のなかで石母田正さんが、『母についての手紙』の項で、魯迅が柔石の死を想うに際して、彼の母を語らずにはいられなかったこ

と、朝鮮の詩人許南麒が『火縄銃のうた』に夫と息子と孫の三人を民族独立の闘いに捧げた祖母を語り手としておいたこと、これらのことに、『息子たちの行動や事業はいつでも母たちの犠牲となげきによってささえられている』という深い洞察を下しておられることばに深い感銘をうけて、『母の歴史をかくことは、幾重もの重圧の中で、生活のために生き抜いてきた日本の女性の歴史をつづることになります。一人一人の母の歴史を明らかにしてゆくこと。そしてそれらが集積されてゆくと、日本の母たちの、日本の女性の歴史がつくられてゆくことになると考えます』とよびかけているのを読んで、石母田さんの『歴史と民族の発見』とくにそのなかの『母についての手紙』を鶴見さんが泊にこられたときにはなしてくれたり、自分でも読んでいたので、話しあいの結果、『母の歴史』をみんなで書こうということになったわけである。」³

澤井余志郎の証言によれば、当時の歴史学、思想界にあった石母田正／ふるかわおさむの「母の歴史を書こう」路線を泊工場に紹介したのは鶴見和子であった。鶴見和子自身は泊工場で編まれた文集について「その次に生まれた文集『私のお母さん』は石母田正『歴史と民族の発見』の中の『母についての手紙』をよんで感銘をうけ、『お母さんの歴史を書こう』というので、着手されたものである」⁴と書いている。

「母の歴史を書こう」路線そのものは、歴史研究としては女性史研究というジャンルを生み出し、社会運動としては「母親大会」に女性の声を集めるという流れを形成していった。当時の前衛政党であった共産党からも支持されるラインである。「母」はしばしば「民族」の象徴としても支持された。「日本の母」には、息子のために生きる母の自己犠牲という息子の立場から賞賛される倫理をともなっていた。先に紹介した高島青鐘の「おふくろ」は、その典型であろう。この母親像はその後1970年の学園闘争中のポスター「とめてくれるなおっかさん」にいたるまで続く。ふるかわおさむは、「日本の母たちの、日本の女の歴史」というように、

母＝女と同格においた。これでは女性は母親としてしか存在できなくなる。

四日市の生活記録運動は、一応はこの「母の歴史を書こう」ラインの中にあり、石母田正は後にその歴史家としての権威をもって「母と子と」⁵の冒頭に「このような女子労働者の文集（『母の歴史』東亜紡織労組泊支部編）を読んでまず感ずることは、書くということのもっている意味である。それは、われわれのばあいとひじょうにちがって、人間の形成における新鮮な意味をもっている」と書いて、四日市の生活記録運動を高く評価したのであった。

同時に石母田が書いた「われわれのばあいとひじょうにちがって」という一句は、歴史家がいわば「かのじよたち」労働者にとって書くという行為は知識人「われわれ」とは非常に違う意味をもつという認識をもったことを言い表している。じっさい泊工場の生活記録運動においては、書くという行為が現実の生活に生きるという行為に食い込んでゆくのである。また、鶴見和子は生活を記録する会とは別に、東京でたちあげた「生活をつづる会」において「なぜ書くか」という問いに答えたある紡績工場働く女性が「『女子労働者』⁶にはわたしたちのことが書いてあるけど、なんだか、ちがう、という気がする。あれはみんな『かの女たちは』って書いてある。それを『あたしたちは』って書けるようになりたい」⁷と述べたと記している。泊工場の「生活を記録する会」の女性労働者たちも同じであったであろう。鶴見和子が「自己をふくむ集団」からの当事者視点を尊重するゆえんでもある。

もういちど「ならべ読み」を試みるならば、息子の立場から「母をみつめて」を書いた高島青鐘の母親にたいする「ありがとう」と、泊工場の女性労働者たちがその後到達する「母親の歴史を繰り返さない」という決意との間には大きな違いがある。息子とはちがって娘たちは母となるべく想定されている当事者として「母の歴史」を書くのであり、「母の歴史」を書いたあげくに生まれる「繰り返さない」という誓いは、母親の歴史を肯定するのではなく、乗り越える。

共同研究の私たちが現実に2008年夏の伊那における生活を記録する会の合宿で会ったかつての泊工場の女性労働者「進歩的百姓娘」たちは、その母親たちに勝るとも劣らない重労働の生涯を送りながらも、自己犠牲ではなく、それぞれの自己実現の物語を語った。

3) 農村地帯とのつながり

四日市繊維産業の女子工具たちの半数が故郷に帰り、農家の嫁となり母となった理由には、繊維産業の不況、工場の閉鎖の影響が大きかった。それにくらべ東京南部の工場労働者の場合は朝鮮戦争の休戦協定後に日本列島をおおった不況にもかかわらず帰農、帰村の割合ははるかに少なかったのではないだろうか。数年の後、日本社会全体の高度経済成長期がはじまる。1950年代の農村出身の次男、三男であった労働者たちの多くは、都市で家庭をもち、都市の大規模団地あるいは郊外のニュータウンの住人となったのではないか。東京南部には、四日市の紡績女子工具のように「進歩的百姓娘」として帰農し、生活記録の舞台を農村に移して持続的に発信をつづけるという回路は少なかったと思われる。

また帰農があったとしても、高度経済成長期の農村地帯から男性労働者の労働力は、都市インフラをかたちづくる土木工事、都市と都市をむすぶ道路建設、あるいは膨張する都市人口の受け皿となる大型の高層集合住宅やニュータウン建設の現場に季節労働者あるいは出稼ぎ労働者となって再度、都市へとひきよせられていったのではなかったか。『やまびこ学校』の佐藤藤三郎のその後の農民作家としての膨大な著作のように、戦後65年を専業農家として農村地帯にとどまり、その変化を克明に記録した男性はむしろ少なく、その点で佐藤藤三郎の記録は貴重である。

けっきょく日本の高度経済成長期のあいだ農業に占める兼業農家割合は増えつづけたのであった。「かあちゃん農業」「高齢者農業」と呼ばれるように、農業の担い手はしだいに女性と高齢者となった。「生活を記録する会」のメンバー、かつての四日市市東亜紡織泊工場の女性

労働者たちは半数以上が前述のように農村に帰り、農家に嫁いで、農業の重要な担い手となったのであった。そこから『東京南部サークル雑誌集成』が1950年代の青春の記録として終わるのにたいして、「生活を記録する会」は、青春の記録としての第Ⅰ部全7巻（1952年～1961年）の後に、第Ⅱ部全5巻（1964年～2008年）を書きつづける結果となった。第Ⅱ部においては、農村地帯からの発信が中心となりながら、都市との発信がつづけられた。日本の高度経済成長期は、人口の移動が還流する都市と農村の両側から見る必要があるが、この点で「生活を記録する会」の人々は移動の主体として、また農業の担い手として農村地帯から高度経済成長を記録している。産業構造の変化、流通の変化が農村の生活を劇的にかえてゆく過程の記録としてこのうえなく貴重であろう。

4) 表現のジャンルと文体のちがいがい

四日市の生活記録運動は、おもに散文を表現手段とした。それも生活綴方らしい伝統である「調べて書く」「互いに読む」つまり調査、分析、討論の手續きをとることが多い。もういちど『私の家』『私のおかあさん』『母の歴史』の3文集に戻るならば、生活を記録する会の人々は、これらの文章を書くにあたっては故郷の村に手紙を書き、また帰郷の機会に親たち、兄弟姉妹たちにインタビューをして母親のライフヒストリーだけでなく一家の農業の規模、生産に必要な肥料代、労働力のコストを素朴ながら数値で表現する努力を重ねている。共通する貧困、過労、不自由という現象が浮上すると、その原因を知ること执着し、工場労働についても、家計補助労働とみなされるがゆえの低賃金、仕送りと監視の仕組みを把握する、さらには「母の歴史をくりかえさない」ためには何をすべきか、という次の課題の設定を行う。

東京南部の文集もまた自分たちが対象である労働搾取の実態調査、占領軍と軍需産業の共犯関係と上下関係の分析に力をそそぐ。軍事基地である羽田空港へ臨時雇いとして潜入して観察する危険をおかすことまでしている。軍需産業に従事するところから、国家の動向と世界情勢

についても情報通である。しかし詩という表現手段は凝縮には適しているが、執拗な持続にはむいていないのではないか。先の「母」というテーマについても、娘労働者たちが息子たちとはちがって、母となるべき当事者意識をもって考察するからだけでなく、散文表現には詩の表現にはない執拗さがある、母にたいする「ありがとう」という叙情表現で終わらずに次の課題の発見にまでいたることをさせる。

詩が実践や行動から遠いというわけではない。労働詩はしばしばシュプレヒコール的表現をとって読者を勇気づけたであろう。東京南部のサークル雑誌の詩には、曲がつけられて流布していった。シンポジウム「東京南部の青春」には、歌曲「原爆をゆるすまじ」の原作者が出席していた。

なお、1950年代のサークル雑誌には表紙、挿絵、カットにしばしば版画が使用されている。四日市の生活を記録する会の文集にはいわゆる生活版画系のイメージが多い。東京南部の場合、生活版画系の絵の他に、専門家としての技術があることがわかるドイツ表現派、あるいはロシア未来派風、さらには抽象画的な絵が混在している。後者は工作者を名乗って参加した芸術家たちの手によるものが多い。首都圏の運動の特徴と言えるかもしれない。九州のサークル運動の場合には、さらに違う要素が加わるであろう。

5) キーパーソンあるいは工作者の特徴

各地域のサークル雑誌群を「つづけ読み」「ならべ読み」とすると、集団のなかからキーパーソンが出現して運動をとりまとめ、やがてキーパーソンの交代があって、集団の変質がひきおこされてゆくところがわかる。外部からの参入の影響もある。「工作者」という言葉は九州のサークル村を率いた谷川雁によって積極的な意味内容を与えられるのであるが、東京南部の場合、共産党から使命をおびて派遣される、あるいは文化運動を業績とする黨員意識があったことが証言されている。復刻版の解説（道場親信）には「下丸子文化集団は、アヴァンギャルド芸術家と労働者作家たちとの出会いから誕生した。1951年春、総合芸術運動団体『世紀の

会』で活動を共にしてきた作家の安部公房、画家の勅使河原宏と桂川寛が揃って日本共産党に入党を申請していた。彼らは『入党したときの業績にしたい』という思惑（桂川寛氏の回想による）もあって、下丸子の労働者街に入り、文化運動を促す『オルグ』の役割を果たした」（p.16）とある。

四日市の生活を記録する会や公害を記録する会の場合には、キーパーソンが交代することなく、澤井余志郎の持続力によって終始一貫されているのが特徴である。またキーパーソンとしての澤井余志郎は強力な指導者として先にたつて集団をひっぱるというよりは、むしろ記録に専念する黒子の役割を自認し、みずからを媒体として人々をつなぐところに活動の特徴がある。九州のサークル村における森崎和江をはじめ数多くのライターを育成し、むしろ育てたライターたちが各自の確固たるテーマをもち、作品を構築するにつれて押し出されるような形で集団を出てゆく谷川雁とも異なる資質であろう。

IV あらためて鶴見和子文庫という結節点について

それぞれの地域は、サークル雑誌の刊行を重ねるうちに数々の専門的ライターを育成していった。東京南部の労働者作家たちの多くは運動の終焉後にはルポライター、業界紙の記者、編集者になって書くことをつづけている。九州のサークル村は職業作家を輩出した。四日市の澤井余志郎は職業作家とはならず、同人誌の発行人、裁判記録の編集発行人、という独自の道を歩んでいる。

こういった各地のサークル運動を紹介し、交流への道をひらいたのは鶴見和子が深くかかわった思想の科学研究会であった。雑誌『思想の科学』の前身である『芽』創刊号には「綴方広場」と題した欄が設けられており、国分一太郎「生活綴方をおとなのものにするには」、米倉良子「竹の子の会」が載っている。⁸ 思想の科学研究会はその後も雑誌『思想の科学』にさまざまな地域で展開されていたサークル運動から生まれた書き手たちに、時にはテーマを設定して書かせて表現の力をさらに磨く機会を与え、

一般読者に紹介、さらには商業雑誌や出版社へデビューさせる役割を果たした。思想の科学社の人々のなかでもとくに鶴見和子は「生活を記録する会」の人々とむすんだ長年の信頼関係がその一つであるように、幅広い人脈を有し、自らをネットワークの結節点となして生きた。鶴見和子文庫には同時代に開拓され広がったネットワークの結節点に集積された資料が残されていると考えるべきではないだろうか。同文庫には鶴見和子の草稿やノートのほか、書簡など未整理、未公開資料が数多く存在する。

1950年代のサークル誌復刻版がぞくぞくと出版されている今の状況を踏まえてさらにどのような研究が可能か。この問題を解く鍵は鶴見和子文庫の未公開資料のさらなる解読作業にあると思われる。とうぶんは研究者たちによって原資料の解読、整理、データ化の地道な努力がつけられ、やがて利用者一般にとってアクセス可能な資料体が形成され、鶴見和子文庫そのものが戦後研究ネットワークの重要な結節点の一つとなるであろう。データベースが利用者一般や他の研究機関や共同研究にたいしても開かれ、広くリンクされてゆき、学部生、大学院生をふくむ次世代研究者の研究交流がさかに行われる日を夢見ながら、報告の筆を置く次第である。

引用参考文献

- 池上善彦編『現代思想臨時増刊号 戦後民衆精神史』、青土社、2007年
 石母田正『戦後歴史学の思想』、法政大学出版局、1977年
 木下順二・鶴見和子編『母の歴史』、河出書房、1954年
 九州サークル研究会発行『サークル村』全2巻+付録1+別冊1、不二出版、2006年
 公害を記録する会（代表 澤井余志郎）編『「四日市公害」市民運動記録集』全4巻、日本図書センター、2007年

- 思想の科学研究会編『共同研究 集団』、平凡社、1976年
 生活を記録する会（代表 澤井余志郎）編『紡績女子工具生活記録集Ⅰ』全7巻、日本図書センター、2002年
 生活を記録する会（代表 澤井余志郎）編『紡績女子工具生活記録集Ⅱ』全5巻、日本図書センター、2008年
 正木基+石崎尚編『図録 '文化' 資源としての<炭鉱>展』、日黒区美術館、2009年
 鶴見和子『鶴見和子曼荼羅』全9巻、藤原書店、1997-1999年
 鶴見和子『生活記録運動のなかで』、未来社、1963年
 『編集復刻版 東京南部サークル雑誌集成』全3巻+付録1+別冊1、不二出版、2009年
 西川祐子・杉本星子編『共同研究 戦後の生活記録にまなぶ-鶴見和子文庫との対話・未来への通信』、日本図書センター、2009年

注釈

- 1 別冊である復刻版総目次に「解説」（道場親信）、「解題」（浜賀知彦）、「回想」（浅田石二、桂川寛、丸山照雄、望月新三郎）が付されている。
- 2 成田龍一、鳥羽耕史、道場親信、池田雅人「討議 戦後民衆精神史」、『現代思想』vol.35-17, pp. 229も参照できる。
- 3 木下順二・鶴見和子編『母の歴史』、河出書房、1954年、pp.153-154
- 4 鶴見和子『生活記録運動のなかで』、未来社、1963年、p.77
- 5 石母田正『戦後歴史学の思想』、法政大学出版局、1977年、pp.429-438に収められている。初出は『歴史評論』50号、1954年7月。
- 6 同時代に出版されている嶋津千利世著『女子労働者-戦後の綿紡績工場-』（岩波新書、1953年）を指すと思われる。
- 7 鶴見和子『生活記録運動のなかで』、p.51
- 8 『芽』第1巻、第1号、思想の科学研究会、1953年1月、pp.21-30。『芽』は鶴見和子文庫の所蔵である。